

KIT NEWS

国立大学法人 京都工芸繊維大学 広報誌
Kyoto Institute of Technology

Vol. 34 2013.11



巻頭特集1

京都のものづくり産業の 未来と本学の役割

古山 正雄 学長
服部 重彦 京都工業会会長

巻頭特集2

地域のニーズを大切にし、 まちづくりを支援する

建築造形学部門
佐々木 厚司 講師

教育NOW

生体分子工学部門
池上 亨 准教授

研究室探訪

言語・文化部門
深田 智 准教授

数理・自然部門
井川 治 教授

活躍する卒業生

株式会社東畑建築事務所
岡本 茂 様

富士通株式会社
山本 智 様

美術工芸資料館収蔵品紹介

「野分文庫」と「猪図時絵下絵」

Topics



古山 正雄 学長

す。COI (Center of Innovation: 革新的イノベーション拠点の中核機関) です。それから、もうひとつは国際交流ですね。現在、本学でもミッションの再定義を行い、改革実行プランを実行しておりますが、自己完結するのではなく、社会からの要請を踏まえることが重要です。今日は、服部京都工業会会長から忌憚のないお話をいただければと思っています。

服部 京都工芸繊維大学と言えば、リサーチ、エンジニアリング、それにデザインという3つの分野を挙げることができると思いますが、なかでも産業界にとって重要な、エンジニアリングに特に強いという印象があります。現在、島津製作所には、貴学の卒業生が107名在籍しています。そのうち28名が経営基幹職(管理職)となっており、中心的な役割を果たしています。例を挙げれば、アメリカの医療系機器販売子会社の社長が貴学の卒業生です。また、ノーベル化学賞受賞者である田中耕一の研究所がありますが、その副研究所長も貴学の卒業生です。非常に若い人ですが、田中に請われて副研究所長を務めています。107名のうち28名が経営基幹職というのは、他大学と比べても高い率です。研究とものづくりを中心とする島津にとっては、貴学の卒業生は非常に大きな戦力です。

古山 それは嬉しいですね。島津製作所は、企業として、多くの人から敬愛され、尊敬されるという名門性をお持ちです。単に経済的な側面だけではなく、歴史に裏打ちされた伝統と格式の側面があって、文化性を強く感じます。そうしたこともあり、学生の憧れも強いようです。

服部 ありがとうございます。先ほど社会貢献のお話がありましたが、貴学は、地域に密着したきめの細かいコラボレーションをとっておられる印象があります。私たちも、企業体として、地域社会の核でありたいと思っています。あるいはイノベーションの核でもありたいですし、グローバルな人材協力にも力をいれています。ですから、目指しているものが貴学に近いものがあると思います。



服部 重彦 会長

社会全体のイノベーションのために

古山 イノベーションということでお聞きしたいのですが、企業が自らの事業方針として目指すイノベーションということのほかに、社会全体としてのイノベーションということもあるかと思います。例えば、ものづくりにおけるイノベーションが、社会全体のイノベーションにつながるということもあるでしょう。服部会長は、京都工業会の会長として、京都の中小規模のものづくり会社の発展や、海外進出を促進する仕組みづくりにご尽力なさっていますが、社会全体のイノベーションという視点で見たとき、京都の現状はいかがでしょうか。

服部 大きくなった企業を見ると、まだ中小企業であった時期に、自社の開発した技術や製品によるイノベーションにより、あるレベルまでは行きますが、そこから先はやはり大企業のサポートを受けて発展するケースが多々見られます。その意味で、大企業を中心とした企業群の存在も中小企業育成に大変重要です。しかし、最近では違う動きも出てきています。その例として有名なのが京都試作ネットです。これは、中小企業が大企業を中心とした産業構造の単なる一層としてのものづくりに携わるのではなく、自分たちで、イノベーションにつながる最先端部門を担おうとする試みです。一社だけでは力不足なので、異なった業種の企業が集まり、一週間程度で試作を行うというキャッチフレーズで、世界に向けて発信しています。従来は、大企業から仕事を下請けするという発想でしたが、インターネット時代になって、自分たちが仕事を直接とりにいける環境ができています。その環境を活かした仕組みを創り出しています。自分の会社の業績を上げながら、グループとしての力も出していかなければならないので、大変なことです。代表理事の竹田正俊さんを中心としながら、精力的にやっておられます。こうした試みで、5~10年経てば産業構造も少し変わるのではないかと思いますね。

古山 経済的には大変な部分もあるかと思いますが、京都試作ネットの試みは、ものづくりにおける産業構造の階層



性を変えるという意味で、社会に与えるインパクトは大きいですね。何よりもわくわく感がありますね。

経済合理主義以外の価値観の大切さ

古山 京都試作ネットの話は、中小企業による挑戦ですが、規模ということでは、本学も小規模大学です。私は今、大学は小規模大学が面白いと思っています。アクションを起こすと、社会からの反応が直接的に分かりますし、海外に行った際にも多方面の方と直接お会いすることができます。おそらく、京都試作ネットの竹田さんも同じことを感じていらっしゃるのではないかと思います。以前は、企業も規模が大きい方がいいと言われていましたが、必ずしもそうでないという時代感覚があります。

島津製作所で活躍する卒業生たち

古山 現在、国立大学には、自らがどこから来て、今後どういう方向に発展していくかを考えること、即ちミッションの再定義が求められています。国立大学に求められる改革実行プランは社会との関係を強く意識した改革となっており、教育・研究に附して、第三項目として社会貢献が必要とされています。社会貢献と申しましたが、それはつぎの三本柱からなっています。まずは、国立大学は地域の核たれということ。地域に根差した大学を目指し、地域に貢献することですね。これはCOC (Center of Community: 大学の社会貢献・地域貢献の機能を強化するため、京都府内の自治体と連携し、地域課題の解決を図る地域の拠点となる取り組み) と申します。つぎに、国立大学はイノベーションの核たれということ。それによって産業界に貢献することが求められま

服部 確かに最近の流れとしては、その方がいいかもしれないですね。大規模な大学だとマネジメントが効きにくい部分があるのではないのでしょうか。貴学ぐらいのサイズですと、学長の想いや方針が全学的に浸透しやすいと思います。実は島津製作所も、規模で言えば、大規模とは言えません。中規模です。この規模ですと、社長の考えを全体に浸透させ、実行に移すことが比較的しやすいといえます。

古山 先ほどわくわく感と言いましたが、経済活動のなかには、そうした人間特有の幸せ感や満足感も必要なのかもしれないと思います。経済合理主義以外の価値観が必要だと思えます。

服部 社員がいて、その家族がいて、さらに協力会社があって、3万人、4万人という集団になるわけです。そこに参加する人たちが、きちっと生計をたて、人生をステップアップさせる基盤となるのが会社だと思えます。社長は、常に社員のこと、社員の家族、協力会社のことを考えなければいけません。勿論、資本主義ですから、資本に対してきちんとリターンすることは必須です。企業のやるべきことは、この二つ以外にはないのではないかと思います。日本の企業は、アメリカ的な発想を追いかけてきましたが、大震災の影響もあるかとは思いますが、ここに来て日本流の経営を再評価する時期に来ているかもしれませんね。

ものづくり企業が育つ基盤としての京都

古山 先日東京で、ある外部資金の申請があったとき、本学のプログラムは、審査員から「京都らしい」と評されました。京都らしいというのは、京都の伝統文化をさしているわけではなく、近代化していく過程で、様々なものづくり企業が育ってきた地盤として京都を見ているようなのです。ものづくりを考える際、伝統文化における身体化されたものづくり、即ち手で作ることの重要性を見逃してはならないですが、それに加え、社会の要請に即答するという側面も重要です。それこそが近代的なものづくりの特色とも言えます。それを京都の得意技であると、東京の人が見ているのが興味深かったです。

服部 京都には、深掘りの伝統があります。特定分野を調べていく姿勢です。ある分野を調べていきますから、事業範囲をそんなに広げることができません。ものづくりの深掘りをして、結果として一流となった企業が京都には多いです。また、人の真似はせず、人に真似もされたくないという企業文化が京都にはあります。この分野はあの会社がやっているから、うちはやらないと考えるわけです。その結果、京都

の企業は、それぞれみんな違うことをしています。

古山 それぞれの分野を究めているわけですね。

服部 京都人は、京都を都だと思っていることもあって、東京で成功しなければならないという気持ちが強くありません。京都で事業を興し、即海外で勝負する例が多いですね。日本の企業風土は基本的に保守指向ですから、無名の企業が全く新しい部品を提案しても、なかなか採用してくれません。京セラさんも村田製作所さんも、東京を通過せずに、直接、海外に出て成功されたと聞いています。海外で評価され、その後、日本に逆輸入という形で評価される流れがあります。島津の場合も、かなり早い時期から海外に出ていています。大正時代に、既に大連やベルリンに支店を設けています。

文化を理解することの重要性

古山 京都の企業が、東京を経ずに、即海外で勝負というのは興味深いです。企業の発展にとり、海外に出ていくことがとても大事なのですね。教育の観点からも、学生が海外で体験を積むことはよいことです。その際、一般的に語学力の有無が問題とされますが、学生諸君を観ていると、実際にはあまり心配しなくてもよいようです。あまり構えないで、海外に普通に行けるようになってきているように思います。

服部 英語が得意でなくとも、専門分野に関しては、学会などで十分に通用します。しかし、さらにコミュニケーションを図ろうとすると難しい点があります。外国で、その国の方とご飯を食べながら話をするには、その国の歴史や文化を知ることが必要です。最初は日本語で学ぶのでもいいと思います。本当の意味での国際的な人材となるためには、



文化の理解が不可欠ですね。

古山 確かに、英語力の問題もさることながら、話すべきコンテンツが問題ですね。スポーツ、美術、音楽といった分野の話ができるといいですね。特に欧米などの知識層には音楽を好きな人が多いですから、音楽の話ができるといいのですが。

服部 なかなかそこまで求めるのは難しいですね。なるべく若いうちに、海外で経験を積むことはよいことだと思います。ただ、学生さんの留学経験が学内の経歴上口スになるような場合はないでしょうか。そういうことのないように、単位互換などの仕組みが必要ではないかと思いますが、いかがですか。

古山 会長のおっしゃるとおりです。留学先の大学との単位の互換や、あるいは共同の学位を出すことなどの検討を行い、留学経験を活かせるようにしたいと考えています。

実りのある産学連携を目指して

古山 共同研究などの産学連携の取り組みについて、産業界からのご要望などはございませんか。

服部 島津製作所の社員は、連結で1万人、単体で4000人。そのうち、研究者は900人ほどです。この内容では、多品種の製品を扱っている当社の場合、社内だけの力で商品を開発することは出来ません。その意味では、大学の研究室との共同研究は必要だと思っています。私が入社した頃の1970年代は、大学と会社の人的交流が盛んで、先生方の提案で、多くの商品開発を行うことができました。一時共同研究が少なくなりましたが、最近又増加しており、企業にとって

は力強く感じています。

古山 大学教員の研究の評価が学会の論文に集約される傾向があり、それによって、研究開発における企業側のニーズとの間で乖離が生じているかもしれません。

服部 企業にとって意味のある産学連携をするためには、大学で行われている研究のうち、自分達が必要としているものを見つけ出すことが必要となります。そうした際に、大学の研究内容のデータベースがあると便利です。その意味で、貴学の「知のシーズ集」は、企業にとってありがたいものです。

古山 ありがとうございます。「知のシーズ集」は、産学連携の機会を生み出すための、本学から産業界に対する情報発信の試みのひとつです。これを通じて、企業の皆さんが本学の研究内容に関心を持っていただければ幸いです。

服部 アメリカの場合は、大企業が有望なベンチャー企業を買収するというサイクルが出来あがっています。ベンチャーの多くが大学での研究活動の延長線上で生まれることを考えれば、このサイクルも産学連携のひとつだと思います。そうした連携を日本で生み出せないかと思っています。また、貴学の「ものづくりイノベーションネットワークの構築」のプロジェクトにも期待しています。これは、先端研究と試作のものづくりネットワーク化を図ろうとする試みで、産業界の弱い部分を補強しようとするものだと思います。

古山 本学としては、今後も産業界に有為な人材を供給したいと考えておりますが、現在、産業界ではどのような人材が必要とされていますでしょうか。

服部 ひとつには、現在、職種としてプロセスプロデューサーという概念がつかわれています。実は、企業の社員には、本当の意味でものづくりのプロセスをわかっている人が多くありません。リサーチはできるが、図面も描けない、加工法や材料も分かっていないエンジニアが多くいるのが現状です。プロセスプロデューサーは、ものづくりの現場で生じるそのギャップを埋める人材です。ものづくりの現場のプロセスを理解している人材を、貴学におかれまして、ぜひとも育成していただきたい。企業からも講師を派遣するなどして、産学共同で人材を育成できればと考えます。産業界の発展にとって、貴学の果たす役割は大きいと思います。

古山 本日はお忙しいなか、貴重なお話を賜り、ありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

地域のニーズを大切に、まちづくりを支援する

大学院工芸科学研究科
建築造形学部門

佐々木 厚司 講師

巻頭 特集2

まちづくりの経験をCOC事業に活かす

大学には、人材育成や研究成果の還元などを通じた社会貢献が求められています。本学は、創立以来、地域志向の取り組みを行ってまいりましたが、平成25年度からはCOC実行本部を設置し、全学的にCOC事業（COC: Center of Community、大学の社会貢献・地域貢献の機能を強化するため、京都府内の自治体と連携し、地域課題の解決を図る地域の拠点となる取り組み）を推進しています。そうした中、本学と舞鶴工業高等専門学校が共同して取り組む社会貢献事業が、文部科学省の実施する「平成25年度 地（知）の拠点整

備事業」に採択されました。（事業名：京都の産業・文化芸術拠点形成とK16プロジェクト）そして、この事業の一環として京都のまちづくり活動を担当するのが、佐々木厚司先生の「まちづくり研究室」です。

三山に囲まれ同心円状に収斂する京のまち

大学には、人材育成や研究成果の還元などを通じた社会貢献が求められています。本学は、創立以来、地域志向の取り組みを行ってまいりましたが、平成25年度からはCOC実行本部を設置し、全学的にCOC事業（COC: Center of Community、大学の社会貢献・地域貢献の機能を強化するため、京都府内の自治体と連携し、地域課題の解決を図る地域の拠点となる取り組み）を推進しています。そうした中、本学と舞鶴工業高等専門学校が共同して取り組む社会貢献事業が、文部科学省の実施する「平成25年度 地（知）の拠点整

と」といいます。「地域づくりは最終的に地域の方に任せるべきです。そのため地域の方のお話を聴き、地域の行事に参加して、地域の方と一緒にまちづくりを考える姿勢が重要です。耳を傾け、相手のニーズを確認する。相手の考え方や思いをベースにして、次につなぎ、流れをつくるのが大切です。ただ、地域の方自身、将来が見えない状況のときもあります。その場合は、従来の意識を変えてもらうことから始めないといけません。未来への可能性を信じてもらう、元気になるっていただくことです。」

本学の卒業生でもある佐々木先生は、現在、キャンパスのある松ヶ崎地区を、景観というテーマのもと地域資源を見直

建築という観点から言えば、ものを新たに作り出すというより、地域に育まれた各種資源をいかに再生し、いかにまちに生かすかという考え方に行き着きます。」

成果を挙げる「まちなかインターン」

佐々木先生は、「学生が積極的にまちづくりの現場に関わること、寄り添うようにすること」を心がけているといいます。「まちづくりにおいては、若い人たちが力を発揮します。地域の方も学生を受け入れてくださいます。これは、学生を大切にする、京都という町ならではのことでと思います。まちづくりの現場での経験は、机上の学習とは全くレベルの異



備事業」に採択されました。（事業名：京都の産業・文化芸術拠点形成とK16プロジェクト）そして、この事業の一環として京都のまちづくり活動を担当するのが、佐々木厚司先生の「まちづくり研究室」です。

佐々木研究室は、これまでも京都の多くの地域でまちづくりの研究活動を行ってきた実績を持っています。例えば、三条通りの道路改修計画が持ちあがった時の話し合いが契機となり、魅力あるまちづくりに向け、商店の減少やマンションの増加などの課題への取り組みが為されました。その際、佐々木先生が中心となり、研究室の学生も議論に参加しました。「祇園祭の観光客をいかに三条通に呼び込むか」といった具体的なテーマで議論を重ね、その取り組みは、灯をテーマとした様々な作品を三条通りの軒先・ファサードに展示する、「三条灯プロジェクト

みは、調べていくと、その隣の地区でも同じような課題をもって、山麓地域すべてにつながる話に見えてきます。昔は、そうした地域間に共通性があったのですが、今は途絶えてしまったところが多く、大所からの視点が求められています。たとえば、私が「この地区は踊りの継承をしようとしています」と隣の地区の方に伝えると、「へえ、それは知らなかった」、「ならば何か応援できることは?」となり、途絶えていた伝統の復活につながったこともあります。その意味で、京都にはいろいろな可能性が満ちており、地域に密着すればするほど、発見があります。」

地域の声やニーズにしっかり耳を傾ける!

佐々木先生は、まちづくりのポイントを「地域に根差すこ

し、未来像を提案する企画に取り組んでいます。「遡れば左京区役所移転計画を機に、2006年から今年で約八年の活動になります。旧街道をはさんで山側の地域は、古くからの住民で構成され、700年の歴史ある文化の伝承という課題があり、高齢化も進んでいます。それから、大学周辺の地区があって、マンションも多く立ち並んでいます。お互いに何をしているかわからない、交流したいがどうしていいかわからないというのが当初の状況でした。振り返ると、自治連合会やキーとなる自主組織を含めた地域団体をいかに盛り上げるかということを進めてきたことが今、実を結びつつあります。例えば、山麓～山並み背景地として風光明媚な山紫水明の環境との共生をいかに具体化するかということが地域のテーマとして認識されつつあります。」

なる良い効果を学生に与えます。私は『まちなかインターン』と呼んでいるのですが、その経験に基づいた実践・実証的な研究は学会での実績ともなり、さらに創造的なテーマ展開によって各種提案型コンペでも評価を勝ち得ています。彼らは卒業後も、関わった地域の『まちづくりのOB』ということで、祭りの機会などに帰ってきます。研究室に戻る前に、応援した地域に挨拶にいった、その報告を地元から聞くことも多く、彼らの成長には少なからず驚かされます。まちづくりは、地元の方と大学で学ぶ若い世代、それに行政の三位一体です。すすめていくものだと実感します。求められる限り、地域再生のためのその『つなぎ役』を教育研究と一体に今後も果たしていきたいと思っています。」

有機化学演習



大学院工学科学研究科 生体分子工学部門 池上亨 准教授

有機化学の論理を身につけるために

数多くの問題を解き、繰り返し書くこと

2年次後学期開講の『有機化学演習』を担当する池上亨准教授は、「小さな分子を意のままに扱って、別のかたちに変えていく方法は、有機合成化学でしか学べません」と言います。「大学で一番難しい科目は有機化学だという人もいますが、本学に合格する能力があれば理解できます。有機化学を難しいという学生はそもそも勉強していないことが多いです。有機化学を理解するためには、問題をたくさん解いて、反応式をたくさん書くことが必要と言われています。書けば記憶に定着しやすいので、わかるまで何度でも書くことが大切です。だから反応式を繰り返し書かせます。正しい

反応式が描けるようになるまで、妥協せずに徹底的にやります。」と語ります。

演習科目は、これまでに学んだ内容を扱うのが一般的ですが、池上先生が担当する『有機化学演習』は異なります。「有機化学の全分野を学び終えるのは、カリキュラム上は3年次後学期です。一方で、生物化学などの分野で有機化学の知識が必要な部分が多くあるのですが、有機化学の講義がすべて終わるまで待っていると、それが関連する分野を学ぶ際に不便である。ですから、『有機化学演習』では、『有機化学I』および『有機化学II』の講義内容の確認と、それ以降の有機化学系科目の準備も兼ねて、有機化学の全分野を扱います。」

池上先生は授業の進め方についても工夫しています。「授業の時間配分は、講義が40分、演習が30分、そして最後の20分で小テストを実施します。小テストは毎回採点して理解度を確認します。それに基づいて、学生に指導を行います。小テストで多く見られた間違いは、「解説」にまとめて配布しますが、小テストの答えは最後まで配りません。また、小テストの間違った箇所を直して提出すれば、半分の点数を加算しています。授業で扱う教科書はボルハルト・ショアーの『現代有機化学』ですが、非常に大きくて分厚く、初めて有機化学を学ぶ人にはやや難しい本です。机に置くと、ほかには何もおけないほどです。そこで、私が本当に重要な点を要約した資料を作成して配布しています。」

全体と部分の関係を把握する姿勢

池上先生は、大学での「化学」は、高校での「化学」とは異なると言います。「高校での化学では、AとBを足すとCができるというように、反応を丸暗記します。しかし、細かく見るとCしかできないわけではありません。反応によってはDもEもFもできるわけです。高校の授業では、そこまで詳しい話はしないですが、大学では違います。扱う反応が膨大な数となるので、暗記で対処するのは不可能です。そこで大切なのは、基本を理解することです。その基本を私は『有機化学の論理』と呼んでいます。この反応は起こりやすいがこれは起こりにくいというのは、試薬とその攻撃を受ける炭素の性



質を見ているとわかります。有機化学の論理がわかると、みたこともないAとBを寄せ集めて、この試薬Cを加えたら、どうなるかが推測できます。自分で答えを導くことができるようになります。ただ、有機化学の論理は複雑なものなので、簡単に学生の目の前に示すことができません。こういう問題を練習すれば分かりやすいのかもしれないと想像しながら学生自身が問題を解くことで、有機化学の論理が自然と構築されるのを待つことしかできません。」

それでは、有機化学の論理を身につけるためのコツはあるのでしょうか。池上先生は、「全体像をきちんと認識して、全体と部分の関係を把握しながら授業に臨むこと」をそのポイントとして挙げます。そして、「クラシック音楽を演奏している学生は、有機化学が得意な傾向があるようです」と言います。「おそらく自分自身が演奏している楽器が、流れていく音楽のなかでどの部分を受け持っていて、どのような機能を果たしているかを意識しているのでしょう。そのため、授業で、ある部分を勉強しているときに、それが有機化学のどの部分を担っているかを把握できるのだと思います。全体と部分の関係を把握する姿勢は、学問をする上で、とても大切です。」

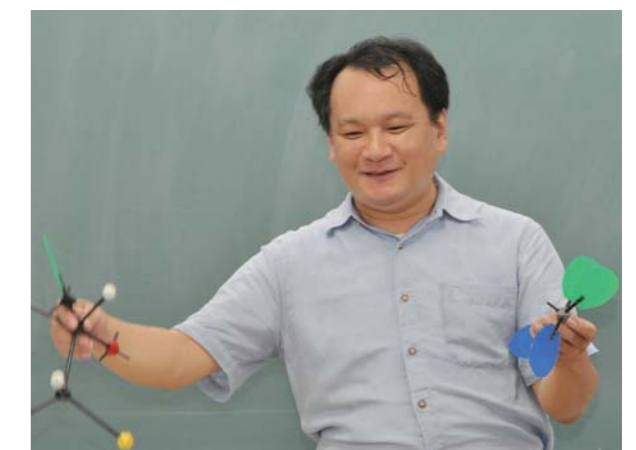
自分の知識で最先端を考える楽しみ

池上先生に「研究をしていて面白さを感じる時は?」と質問すると、「わからないことがわかった瞬間」と即答がありました。「分離媒体、つまり小分子を分ける素材を開発しています。ある分離媒体とべつの分離媒体の違いは理解できる

のだけれど、なぜ違うのかの理由が説明できないと、世界中で言われていた時期がありました。私たちはそれを説明できるものになりたいと思い、分離媒体のテスト方法の開発に取り組みました。紆余曲折があって長い時間を費やしましたが、いざやってみますと、最初はテスト結果が何を意味するのかさっぱりわからない。でも、ある瞬間、ふとわかるようになるんですね。この分離媒体とこの分離媒体は、ここが違うというのに気がつく。そうなる予測が立てられる。実験することでそれが実証できます。あらゆる科学がそうだと思いますが、何百年先までも揺るぎなく伝えられていくのは、実験結果です。様々な仮説があって、それを検証していった結果が、現在の有機化学の知見なわけです。」

「化学というと、有機工業化学とでも言いましょうか、大量に生産されて我々の生活を支えている石油やプラスチックなどをイメージする方も多いと思いますが、現在、有機化学の最先端分野で研究されていることの多くは、医薬であったり、ディスプレイを構成する有機化合物であったり、量的には少しでよいが、我々の生活において重要な機能を果たすものが中心です。こうした最先端の話を理解するためには、この授業で扱うような基本的な部分が大切になります。この授業を通じて、自分たちの知識で、最先端の化合物をどうやって合成したらいいかなど、頭のなかで考えるだけですけれど、そういうことを楽しめるようになってほしいと思います。」

※平成25年度後学期から、生体分子工学部門 森末光彦 助教も本演習を担当されます。



人はどのように言葉を使い、理解するのか

人間の認知機構と言語の相互関係を探求する学問分野です。]

現在の研究テーマについて、深田先生は次のように語ります。「私は、もともと、他人と自分とで同じ言葉に対するイメージが異なることや同じ状況に対して異なる言葉を当てはめることが不思議でなりません。このような違いを生むきっかけの1つには、幼い頃からの言語経験、例えば、どのような状況でどのような言葉に触れてきているか、があるのではないかと思います。分析対象の1つとして、絵本を取り上げ、子どもが絵本を理解する過程、絵本を通して言葉を覚えていく過程とはどのようなものなのかを研究テーマとしているのは、このためです。子どもは絵本を読み聞かされると、どっぷりとその物語の世界に入り込んでしまいますよね。絵本は、言ってみれば単なる絵と言葉の羅列にすぎないのに、どうしてなのでしょう。その一端でも分かればと思います、言語分析はもちろんのこと、心理実験なども試みています。被験者に絵本をみてもらい、そのときにどんな目の動きがあったかとか、その文から何を感じ取ったかなどを調べたりします。」

言語理解のメカニズムを解く

深田先生は、「子どもが絵本の世界に入り込むきっかけとしては、やはり言葉が重要」と言います。「絵本のなかでどんな言葉が使われていて、それが読み手にどんな影響を与えているかを調べていますが、言語学的観点から言えば、擬音語、擬態語や会話文などが特にイメージを伝える機能を果たしているようです。また、読み聞かせる大人が声音を変えたりすると、臨場感ができます。絵本を読み聞かせるお母さんやおばあさんなどの、養育者の接し方も影響を与えているわけです。なかなか難しいですが、子どもが経験したことのが、子供を絵本の世界に入り込ませているのかを知りたいと思って研究を続けています。」

「言葉を理解するメカニズムについては、実はあまりよく

分かっていません。人が言葉を生み出す過程については、例えば、生成文法のノーム・チョムスキーなども述べていますが、言葉を聞いた人がそれをどう理解するのかという点についてはあまり研究が為されていません。しかし、理解ができたときに感情移入が始まり、絵本への入り込みが始まると思いますので、理解ということを中心に研究したいと思っています。今、私にも生後8ヶ月になる息子がおります。生後3ヶ月ぐらいから、私の言っていることを理解しているようにみえるのですが、言葉を理解しているのか、あるいは私の表情をみてそれに反応しているにすぎないのか、よく分かりません。人がどのようにして言葉を自分のものとしていくのか、その過程を解き明かしたいと思います。息子はどんどん成長していきますので、息子の成長にまけないように研究をしたいと思っています。」

主客未分の日本文化を活かした言語理論

今後の研究について、深田先生は抱負を語ります。「現在、科学はアメリカを中心に発展しています。言語学も同じです。しかし、日本から発信できるものもあるのではないかと思います。私もその仕事に参加したいです。私は、自分が感じてきたことや経験してきたことが、言葉にどのように反映されるかに焦点をあてて研究を進めてきました。主体性、主観性、感性、身体性ということに注意してきました。しかし、科学と言った瞬間に、認知言語学以外の言語学の多くは、これらの観点をなくしてしまうことが多いのが現状です。どちらかといえば、西洋の文化は、自分を排除して客観視できることに価値をおきます。それに対して日本には、主客未分の部分を大事にした、自分と世界とを融合させて物事をみる文化があります。認知言語学は主体性に重きを置く言語学ですが、その中で、さらに、主客未分を大切にする日本的な見方を前面に押し出してもいいのではないかと思います。そうして日本発の言語理論、科学理論ができればいいのではないかと思います。」

言葉の大切さを感じてもらいたい

深田先生は、本学で語学の授業も担当していますが、授業のなかでヘミングウェイの短編を取り上げ、そこに描かれた人間関係や情景を思い浮かべて読むために、学生に位置関係や動きを絵と言葉で示させたそうです。「私自身も黒板に絵を描いて説明しました。そうやって情景を思い浮かべると、逐語訳だけでは十分にニュアンスが伝わらないことを教えました。微妙なニュアンスの違いは大切だと思います。いわゆる理系の学問では、できるだけニュアンスの部分を棄てて、数式や図などで、これしかないという表現を目指します。しかし、これだけじゃないという世界が世の中にあって、社会に出て人と何かをつくろうとするときには、そういう曖昧さが障害になったり、逆にいいものをつくる契機になったりします。人と人をつなぐために言葉があって、時には誤解が生まれることもあります。言葉のおかげでうまくいくこともあります。私は日々言葉の大事さを痛感していますが、学生にも言葉を大事にしないといけないと感じてもらえるようにしたいです。」



大学院工芸科学研究科
言語・文化部門
深田 智准教授

認知言語学とは

深田智准教授の専門は認知言語学です。「認知言語学では、言葉の世界を探求するために、書かれたテキストだけでなく、実際の会話データや創造的な言語使用などにも注目しながら、なぜそういう言葉が出てきたのか、頭のなかでどのような処理がなされているのか、心は何をどのように感じとって、それをどんな言葉で表現しているのか、などを考察します。心をつくりあげた背景に何があるかという問題も対象となってきますので、歴史や文化なども関連してきます。認知言語学は、認知科学や心理学の知見を援用しながら、

微分幾何学の分野で 人類史上初の発見



大学院工芸科学研究科
数理・自然部門
井川 治教授

きます。私は、多様体の中でも、特に対称空間と呼ばれるものを主に研究してきました。対称空間の場合、多様体上のさまざまな幾何学的量や定理を詳しく調べることが出来ることが多いので、多様体上の新しい理論が生まれるとまず対称空間に適用してみるというように、多様体論の中ではテストケースとして重要な役割を演じています。」

井川先生は、ホワイトボードを使いながら、ご自身の研究を素人にもわかるように説明します。「簡単な例で言いますと、まず球面を考えてみてください。その球面をグルッと回し、そこに筆を置くと軌跡ができます。例えば、赤道のところにおけば赤道が軌跡となります。北極、南極におけば、点となります。次に、子午線を引いてみます。その子午線の手前だけを考えると、どの軌跡もこの子午線と一点のみで交わっています。点さえ決まれば、軌道が決まる事になります。ここで、子午線をまっすぐのばして横に書き、点で軌道を表現したグラフを書いてみます。曲がっている図形をまっすぐにして、そのうえにグラフが乗っているというイメージです。これにより、球面上の図形の構造が平面に移ることになります。こうすれば、グラフから球面の状態を把握することが可能です。」

誰も考えたことのない理論を産み出す

「数学は自然科学系の他の学問と比べ、いわゆる実験というものはありません。厳密な論理を積み重ねて、定理ができあがっていきます。実験はできないですが、計算することによって規則を発見することができます。数学の研究をして一番楽しいのは、新しい発見をしたときです。新しい発見とは人類史上初ということであり、これまで人類の誰も考えたことがないことをみつけたわけで、とても嬉しいです。」このように語る井川先生は、2011年、専門分野において画期的な業績を挙げました。

軌跡を考えるための理論として、ルート系の理論といわれるものがありますが、その理論には一定の限界があった

と井川先生は言います。その限界を超えるものとして、井川先生は「対称三対 (symmetric triad)」という既約ルート系の拡張概念を定義することに成功しました。「自分の家族に「対称三対」を説明するときには、毛利家の三本の矢だと言っています。なぜかという、「対称三対」とはベクトルの集合だからです。ベクトルは矢で示すじゃないですか。その矢の集まりが3束あるということなので、毛利家の三本の矢なのだと言っています。軌跡を調べるためにつくりましたが、他にも応用できることがわかってきています。図形のなかに小さな図形が幾つかあったときに、その交わりを調べる交叉の理論というものがありますが、「対称三対」を使えば、球面だけではなく、もっと複雑な図形でも交わりを調べることができます。」

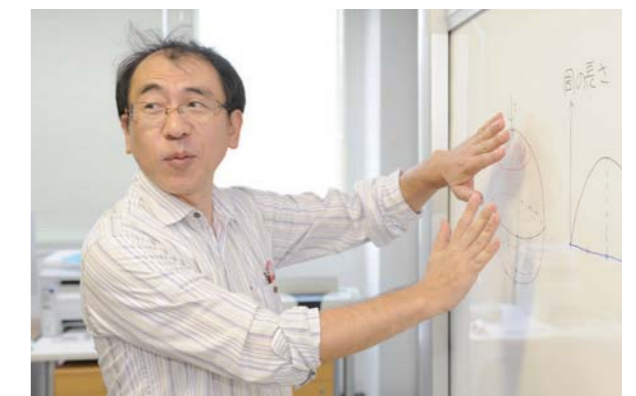
「対称三対」の研究の過程について、井川先生は次のように述懐します。「対称三対」を発見する前は、自分の目の前に大きなコンクリートの壁が立ちはだかっている印象でした。それを突き破ろうと、一日中そのことを考えていました。朝、目覚めた瞬間から考えています。夢のなかにも出てきます。無意識のうちにおいても考えているのでしょう。毎日、立ちはだかる壁をパンチするのですが、いくらやっても突き破ることができません。しかし、定義の完成の2ヶ月ぐらい前から、パンチすると、ぼろぼろと崩れる感じになってきて、それで最後にパンチがあたって、ぼろぼろと壁が打ち破れました。「対称三対」というネーミングも私が考えました。科学研究費の申請の際には、『対称三対の機可学とHerman作用』というタイトルで提出しました。自分で考えた名称をタイトルにしたわけです。私なりに勝負をかけたつもりでした。申請が採択された際には、飛び上がるぐらい嬉しかったですね。」

数学の美しさに惹かれて

数学の理論的研究は工学系の研究と異なり、実用的な応用とは結びつきにくいイメージがありますが、井川先生は、

自らの研究の応用の可能性について次のように語ります。「子供の頃、ウルトラマンの科学特捜隊が持っていた腕時計型の通信機を凄いなと思いました。無線でつながるといことが不思議だったのです。その仕組みを知りたいと思い、アマチュア無線に興味を持ちました。結局、1級の免許もとりました。電波に声を乗せることは、電磁気学という物理理論と、工学系の変調・復調理論が組み合わさる事で可能となります。電波を乗り物とし、声を乗客とすれば、乗り物に客を乗せるのが変調で、乗り物から客を降ろすのが復調です。ここでは、自然界の法則と人間の考え出した工学が見事に合体しています。マクスウェルが電磁気学の理論を体系化したとき、通信への応用までは念頭になかったように、私の考えた数学の理論が、全く思いもよらない別の工学的な要素とつながる可能性もあるのではないかと思います。」

井川先生は、数学者に必要な資質として、「長く考えることが苦にならないこと」を挙げます。「頭の回転が速い必要はありません。ゆっくりでもいいから考え続けることができ、間違ったときに何か変だなと思えることが大切です。結論が出る前から、こちらの方向に歩いていくと、向うに何かがあるのではないかという感覚があります。結論がわかるときは、『その何かがやはりあった』と確認するときなのです。数学はきれいで美しいものだと思います。他にはない美です。脳みそに直接響く美とでもいいでしょうか。美しいだけではなく、そこには豊かな内容があります。そこに私は惹かれます。」



球面の状態をグラフ上で把握する

「数学は、大きく代数学、解析学、幾何学の3つの分野に分けられます。そのなかで、私は幾何学を専攻しています。特に、微分積分を使って曲面や曲線の性質を調べる、微分幾何学を専門としています」と、井川治教授は語ります。「微分幾何学は、多様体上の幾何構造について研究します。多様体とは、曲線(1次元)や曲面(2次元)を一般次元へ拡張したもので、リーマンによって提起されました。曲線や曲面の場合の接線や接平面が接空間に拡張され、局所的にユークリッド空間とみなすことができ、微積分を適用することがで



株式会社
東畑建築事務所
岡本 茂 様

1986年3月
建築学専攻修了

恩師との思い出

私の在学時、環境調整・設備講座の研究室は全盛期で、いつも賑わっていました。そんな時期に研究室に籍を置けたことが、今も貴重な財産です。3回生の後期から卒業までは、石原正雄先生にご指導いただきました。先生が定年退職される年に卒業論文を書いたので、先生の最後の教え子のひとりです。大学院博士前期課程では中澤康明先生に学びました。委託研究などでご多忙でしたが、大変可愛がっていただきました。1985年の1月に委託研究で福井県に出張後、大学に戻ると中澤先生のお姿がなく、急遽入院されたと聞きました。以来、先生は8月まで大きな手術を繰り返しながら闘病生活を送られました。最後にお話できたのは、就職の内定をもらった足で病院に駆けつけ、先生に報告したときです。「ああ、よかったな」と微笑みかけてくださいました。その数日後に先生はお亡くなりになりました。阪神タイガースが久しぶりに優勝した年の暑い夏でした。

環境負荷の小さな建築の実現を目指して

東畑建築事務所に入社し、20年ほど建築設備の設計に従事した後、環境計画室に転属となりました。以来、省エネルギーや自然のめぐみを組み入れた環境負荷の小さい建築の実現を目指して、設計担当者への助言や提案・新しい技術の研究などに取り組んでいます。地球温暖化問題や3.11などから、エネルギー消費の少ない(あるいは実質ゼロの)建物をつくり続けねばならないと切に感じています。その積み重ねが、地球上の多くの生命を守るのだと思います。

また、このたび京都市環境配慮建築物顕彰制度第1回「京(みやこ)環境配慮建築物」(一般建築物改修部門)に応

募した「京都市立朱雀第四小学校工コ改修事業」で、京都市長より優秀賞をいただきました。教室に自然の風が流れる工夫を取り入れるなどのハードウェア改修をしながら、わざと改修前のままの教室を残し、その差を体感できるしかけや、雨水貯留槽の水位や太陽光パネルの発電量の見える化など、環境教育のきっかけを提供しています。また、深い軒庇や土間空間など、京町家をイメージした設計としています。実は、京町家には日射の遮蔽や自然通風のための工夫が盛り込まれており、それを今の技術に置き換えれば、「環境配慮建築」が自ずとでき上がるのです。この校舎を通じて子どもたちが環境に少しでも興味をもってくれれば、将来、地球温暖化は少しでも緩和されるのではないのでしょうか。

即戦力として活躍する卒業生

建築業界には京都工芸繊維大学の出身者が多いです。朱雀第四小学校のプロジェクトにも、社内で4名の卒業生が携わりました。京都工芸繊維大学出身者の最大の強みは、即戦力であることだと思います。大学入学時から叩き込まれた設計者としての心構えやテクニックは、他大学の卒業生に比べて明らかに勝っています。入社してすぐにプロジェクトを任せられても無難にやっつけてのける姿を見ると、頼もしく、かつ、楽しみです。

後輩の皆さん、学生時代ほど自分の時間を潤沢にもてる貴重な期間はありません。今の間に、興味や関心を持ったことをどんどん追求し、知識を深めていって欲しいと思います。最後になりましたが、工学系を志す人は、就職活動においてもうわべだけでなく、実力を伴った自己アピール、技術に裏付けされた説明ができる人になって欲しいと思います。



富士通株式会社
山本 智 様

2012年3月
情報工学専攻修了

誰かのためになる喜び

幼い頃からプログラマーになりたいという夢をもっていたので、情報工学専攻を選択しました。大学では充実した授業が多かったですが、特に面白かったのは、「ネットワーク/情報通信工学」です。今の世界を支えるネットワーク技術を詳しく学ぶことができました。この授業がきっかけで、世界の人々がもっと気軽に繋がることができる世界を自分が作りたいという思いを抱くようになりました。また、この授業を受講したことは研究室選択のきっかけにもなりました。研究室の指導教員は若杉耕一郎先生でした。

研究テーマは「伝搬路推定と周波数オフセット補償が可能なOFDM方式の時間領域キャンセラに関する研究」というものでしたが、アイデアが浮かばず、研究に行き詰まったときもありました。しかし、何度も先生に論文を添削してもらいながら無事に完成し、学会でも発表できたことは、楽しい思い出です。また、老朽化が進んでいた研究室のサーバの総入れ替えに関わられたのも、普段の研究生活では体験出来ないことで、とてもよい経験でした。同期の仲間と互いに意見を出し合い、納期である春休みが終わる日に完成しました。何よりも研究室のみんなが不便であったことを改善し、喜んでもらえたことが嬉しかったです。誰かのために何かをして喜んでもらえることを、嬉しいと感じた瞬間でした。



基地局のスペシャリストを目指して

大学院博士前期課程1回生の夏に、富士通研究所に一ヶ月間、インターンシップでお世話になりました。そこで働く人の姿や仕事の内容に接し、富士通に就職したいと思い、幸いにして採用していただきました。現在は、皆様もご存知である第4世代通信方式であるLTEに携わる仕事をしています。LTEには大学で学んだOFDMの技術が使用されており、大学での研究が活かせる職業に就けたと思っています。特に超小型LTE基地局である「フェムトセル」の製品企画・マーケティングの仕事に携わり、社内での調査や、調査会社のリサーチ結果情報を元に、将来的にお客様が必要とする製品の企画を行っています。将来は基地局のスペシャリストとなり、世界のどこに行っても通用するような技術者になりたいと思います。

やり残しのない大学生活を

会社に入ったらどうしても仕事中心の生活になってしまいますので、勉強、遊び、恋愛等、学生時代に自分がやり残したことをないようにしてください。特にお勧めは、世界の大きさを実感できる留学です。仕事は、会社に入ったら嫌でも覚えるので、会社では得られないような知識や経験を大学時代に得ておくことをお勧めします。京都工芸繊維大学は規模は小さいですが、優秀な先生方がそろっており、自分のやりたい勉強や研究に打ち込める環境が整っています。また就職先も大企業が多く、就職にも強いのが特徴です。

皆様、今後とも京都工芸繊維大学をよろしく願います。



「野分文庫」と「猪図蒔絵下絵」

平成24年(2012)秋、美術工芸資料館を訪ねて来られた老婦人が、一枚の写真を出して「浅井忠のつくったものだと聞いているが本物だろうか」と言われた。美術工芸資料館も登場したNHKの番組を見て、亡くなられたお父上が購入された手箱のことを思い出されたとのことだった。

それは、これまで研究者のあいだでも存在が知られていなかった「野分文庫」(図1)であった。美術工芸資料館が所蔵する「朝顔蒔絵手箱」(AN.1617)と同様に、浅井忠(1856-1907)が図案をつくり、杉林古香(1881-1913)が製作したものであり、なによりも当館が所蔵する浅井忠画「猪図蒔絵下絵」(図2、AN.3439)をもとに製作された「実物」であるという点で、非常に重要な作品である。

「野分文庫」は、縦27cm、横33.5cm、高さ11.5cm、蓋部分の最大立ち上がりは7.9cmで、全体に丸みを帯びた手箱である。



図1 野分文庫

身の底部には金泥で「黙語按」(黙語は浅井の画号)、「古香印」、銀泥で浅井のもうひとつの画号「木魚」の落款が記されている。

共箱は内箱と外箱からなり、内箱には、去風流の家元であり、浅井や古香と深い交流のあった華道家西川一草亭(1878-1938)による箱書があり、内箱の蓋の表には「野分文庫 黙語畫 古香作」と記され、蓋の裏には「一草亭」の署名と押印がある。また、落とし蓋形式の外箱には、「黙語圖按 古香蒔繪 野分文庫」と書かれており、さらに右側面には「水落」と書かれた紙が貼られていて、正岡子規

(1867-1902)に師事した大阪の俳人水落露石(1872-1919)、あるいはその親族の旧蔵品であった可能性を示している。

京都高等工芸学校の教授であった浅井忠と、明治33年(1900)、京都市立美術工芸学校描金科を卒業した後、一草亭やその実弟の津田青楓(1880-1978)らと小美術会を結成するなど、新しい漆芸の研究に取り組んでいた杉林古香が出会ったのは、明治37年頃のことであった。小美術会の活動を「大いに騒がなくちやいかぬ」と奨励した浅井は、その後古香らに「猪の文庫、布袋の圖案、其他四五枚の圖案」を提

供した。これがきっかけで、図案家と若手作家とが共同で研究をおこなう漆芸の研究団体、京漆園へと続く二人の共同製作がはじまる。

「野分文庫」がお披露目されたのは、明治39年9月に古香宅でひらかれた展示会であった。この時の模様を黒田天外が「…當日陳列の製作品中第一との衆

評ありし野猪の文匣がある。」と『京都日出新聞』で報じ、絶賛している。また、文芸雑誌『ホトトギス』第11巻第2号(明治40年12月)では一草亭が「野分文庫」を紹介し、同巻第3号に実物の写真(図3)を掲載している。このように、「野分文庫」は、製作当初から注目され、浅井のデザインした工芸品のなかでも高評価を受けた作品であった。

当時の資料で、実物の写真が掲載されているのはこの『ホトトギス』第11巻第3号だけであり、転載されたものを除き、以降この作品(以下、「初出野分文庫」とする)の画像が掲載された書籍は現時点で見つからない。

そこであらためてこの「初出野分文庫」の写真と今回見つかった新出の「野分文庫」を比べてみる。すると、両者のあいだには、若干の違いがあることが分かる。まず、一点目は、中央より右上の部分、桔梗の花と右側の猪の間に描かれている千草であるが、「初出野分文庫」では、左から流れている千草が一本、交差する千草と交わってそのままつきぬけている。しかし、今回発見された「新出野分文庫」では、交差する千草とぶつかってそこでまっまっている。二点目は、左下の桔梗の螺鈿部分の貝の貼り込み具合で、貼られている貝片のかたちが「初出野分文庫」と「新出野分文庫」では異なっている。この二点から、「初出野分文庫」と「新出野分文庫」とは、同一の作品ではなく、同じ図案をもとにした別の作品である可能性が出てきた。

それでは、なぜ同じ図案をもとにした作品が二点存在しているのだろうか。

佳品と園内で認定されたものに価格を決めて、販売していた京漆園では、その作品が売れた後も、同図案の製品を複数つくることがあったと思われる。当館が所蔵している「朝顔蒔絵手箱」は、身の底部に「黙語按」、「古香印」と落款があるため、浅井図案、古香製作の作品であることが分かっているが、浅井の図案には、「浅井君圖案 迎田君製作」と書かれていて、実物こそ残っていないものの、同じ図案から違う作家(古香と迎田秋悦)が製作していた可能性が想定できる。

このことから、「野分文庫」も古香宅での自作展や関西美術会第五回展に出品された後、売れるか焼失したか、なんらかのかたちで古香の手を離れ、その後、若干のデザインの変更を加えてあらたにこの「新出野分文庫」が作成されたと考えられる。そして、その注文主はやはり「新出野分文庫」の旧蔵者であったと思われる水落露石である可能性が高い。

「野分文庫」の発見は、浅井図案、古香製作の作品として製作当初からもっとも評価の高かった「野分文庫」の作品そのものを知ることができるようになった点で、非常に意義がある。それに加えて、「野分文庫」が複数つくられたことが確認できた点も大変重要である。優れた図案とその作品が周囲からの要望により再生産されるということが、その人間関係も含めて再構成できた。「新出野分文庫」は、明治時代後期の京都の工芸界の一側面を明確に浮かび上がらせる貴重な作品といえるだろう。

現在、この「新出野分文庫」は当館に寄託され、平成25年10月21日から11月30日まで当館開催の「浅井忠と「装飾」—武士山狩図

から図案まで」で展示されている。この機会にぜひ一度この貴重な文庫をご覧いただき、明治末期にはぐくまれた関西における文人たちの豊かな人間関係に想いをはせてほしい。

(美術工芸資料館 和田積希)



図2 猪図蒔絵下絵



図3 野分文庫(『ホトトギス』第11巻第3号より転載)

11/13水

稲盛和夫京セラ名誉会長から三大学教養教育共同化のため、 京都府へ寄附の申し出 - 受贈及び感謝状贈呈式挙行 -

11月13日、京都府への寄附金受贈及び感謝状贈呈式が挙
行され、古山正雄学長が出席しました。

本式典は、稲盛和夫京セラ株式会社名誉会長が三大学教
養教育共同化施設(仮称)建設のため、京都府に20億円の寄
附申出をされたことを受け、京都府公館レセプションホール
にて挙行されました。

三大学教養教育共同化は、京都府立大学・京都府立医科学
大学・本学の特徴・強みを生かしたカリキュラムのもとに学生
の多様な関心・教育要求に応え、総合的に物事を観察し的確に
判断できる能力と豊かな人間性の涵養を図ることを目指して
三大学で連携して行われ、京都市左京区の京都府立大学キャン
パス内に設置される三大学教養教育共同化施設(仮称)
は、その拠点となります。

また、これまで仮称であった施設の名称が「稲盛記念会館」

に正式決定されたことが発表されました。

式典の最後には三大学の学長からの挨拶があり、本学古
山学長からは、「文系・理系の多くの学生が学ぶことは、人脈
形成の場となる」との期待が述べられました。



山田啓二京都府知事に寄附目録を授与する稲盛名誉会長

10/6日

iGEM2013 (国際遺伝子改変マシーンコンテスト) アジア大会で 京都工芸繊維大学チームが銀メダルを獲得

10月6日、香港中文大学で開催されたiGEM2013(国際遺
伝子改変マシーンコンテスト) アジア大会において、本学
チーム「KIT-Kyoto 2013」が銀メダルを獲得しました。

iGEMは、学生自らが遺伝子操作によって改変して考案・作
製した遺伝子やウイルスをパーツとして登録し、大会での口
頭およびポスターでの発表・実験記録や安全性評価・社会活
動といった事項を総合的に競うもので、本学からは今年で4
年連続の出場となります。今大会にはアジア各国から68チ
ームが出場し、日本からは本学に加え、東京大学・京都大学等1
0大学が出場しました。

今年度は、清酒酵母の遺伝子を利用した遺伝子組み換え
大腸菌を利用し、大腸菌自身に日本酒特有のフルーティーな
香りを作らせることを目標にしましたが、「酢酸イソアミ
ル」という香りを作らせることに成功し、本大会での銀メダル

獲得につなげました。

なお、昨年度に行われたiGEM2012でも、本学チームは銀
メダルを獲得しています。



英語で熟演する本学チーム

■松ヶ崎学生館への入居を開始しました

本学では、松ヶ崎キャンパス西側に隣接し、本学学生や提
携大学留学生が入居することのできる個室タイプの居住用
施設として松ヶ崎学生館を建設し、平成25年7月より入居を
開始しました。地上5階建ての全299室で、女性専用エリアも
あります。詳細につきましては、松ヶ崎学生館のHP

http://unilife.co.jp/area/area_keiji/matugasakigaku/seikan/ をご確認ください。

※なお、当館は、株式会社ジェイ・エス・ビーにより運営され
ております。

9/7土

第11回全日本学生フォーミュラ大会において、 本学チーム”Grandelfino”が5位入賞しました

9月3日～7日、静岡県的小笠山総合運動公園(ECOPA)に
おいて、「第11回全日本学生フォーミュラ大会」が開催され、
本学学生によるチーム”Grandelfino(グランドelfino)”
が5位入賞しました。

本大会は、学生の自主的なものづくりの総合能力を養成
し、将来の自動車産業界を担う人材を育てるための公益活動と
して、2003年にスタートしました。競技は、静的審査(コスト、
プレゼンテーション、デザイン)・動的審査(走行競技、燃費
等)で構成され、学生が自ら構想・設計・製作した車両により、
ものづくりの総合能力を競います。

通算7度目の出場となる本学チームは、全ての審査項目の
総合得点で参加77チーム中5位に入り、昨年の優勝に引き続

き、見事2年連続で入賞を果たしました。



視察に訪れていたトヨタ自動車(株)豊田章男社長を囲んで記念撮影

■文部科学省が実施する「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に 本学の事業が採択されました

文部科学省は、大学が自治体と連携して、全学的に地域を
志向した教育・研究・社会貢献を進める取組を支援する事業
として、本年度から新たに「地(知)の拠点整備事業」(大学C
OC事業)を開始し、公募が行われました。本学からは、舞鶴工
業高等専門学校と共同で事業(事業名:「京都の産業・文化芸
術拠点形成とK16プロジェクト」)を申請し、8月2日に両校の
申請が採択されました。

両校は、京都府北部を含む京都府全体において、特に工学
分野で有する知的資源を活かし、産業振興や文化芸術振興、
地域工学系人材の育成などを通じて地域活性化に取り組み
ます。

なお、事業は平成25年9月1日に開始されており、事業期間
は平成25年度から29年度までの5年間の予定です。

■「オープンキャンパス2013」終了のお知らせ

8月9日(金)・10日(土)に、「オープンキャンパス2013」を
実施いたしました。猛暑の中、昨年を大きく上回る約5,000名

超の方々にご来場いただき、盛況のうちに終了することがで
きました。多数のご来場、誠にありがとうございました。

■大学公式ソーシャルメディアアカウント(Facebook、Twitter、LINE)による 情報発信を行っています

本学では、平成25年7月31日からFacebook、Twitter、
LINEに公式アカウントを開設し、情報発信を行っています。本
学の特色である「知」と「美」と「技」をテーマに、教育研究活動
や京都の四季折々の風景などを発信し、地域や社会に開かれ

た大学として、積極的な情報発信・交流に取り組めます。
Facebook: <https://www.facebook.com/KIT.Kyoto>
Twitter: @pr_kit
LINE: @k-it

■ 学 部

入 試 種 別	募集要項 配付開始	入 学 試 験 実 施		
		出願受付期間	試験実施日	合格者発表
一般入試	配布中	1月27日(月)～2月5日(水)	前期:2月25日(火)・26日(水)	前期:3月7日(金)
			後期:3月12日(水)・13日(木)	後期:3月21日(金)

■ 大学院

入 試 種 別	募集要項 配付開始	入 学 試 験 実 施			備 考 () 内は選抜実施専攻※				
		出願受付期間	試験実施日	合格者発表					
博士前期課程	配布中	第Ⅲ期 資格認定申請締切 12月2日(月) 1月8日(水)～1月15日(水)	2月7日(金)	2月19日(水)	(電、情、機、 デ経、先、バ)				
						第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月2日(月) 1月8日(水)～1月15日(水)	2月7日(金)	2月19日(水)	(全)
博士後期課程	配布中	第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月2日(月) 1月8日(水)～1月15日(水)	2月7日(金)	2月19日(水)	(全)				
						資格認定申請締切 12月2日(月) 1月8日(水)～1月15日(水)	2月7日(金)	2月19日(水)	(全)

※電:電子システム工学専攻、情:情報工学専攻、機:機械システム工学専攻、デ経:デザイン経営工学専攻、先:先端ファイブ科学専攻、バ:バイオベースマテリアル学専攻

12月以降の主なイベント

学内・学外を問わず参加いただけるイベント等のご案内です。詳細は、それぞれの問い合わせ先へお気軽にお尋ねください。

開催日	イベント	参加費(有料・無料)	申し込み期限	問い合わせ先	会 場
12月7日(土)	教育懇談会	無料	有	京都工芸繊維大学学務課 Tel:075-724-7123 E-mail:gakumu@jim.kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス
12月12日(木)	知的財産権研修	無料	12月5日(木)	京都工芸繊維大学創造連携センター TEL:075-724-7933 FAX:075-724-7030 E-mail:corc@kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス
12月14日(土)	KITわくわくキャンパスフェスタ2013 中学高校教員を対象とした教育活動支援事業 「理科教員のための現代テクノロジー講座」	無料	12月12日(木)	京都工芸繊維大学電子システム工学部門山下兼一 TEL:075-724-7423 E-mail:yamasita@kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス
12月20日(金)	大学院入試説明会	無料	無	京都工芸繊維大学入試課 Tel:075-724-7162 E-mail:innnyushi@kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス
1月13日(月)	大学改革シンポジウム「グローバル化時代における 日本人アイデンティティを探るシンポジウム」 ～伝統文化都市京都からの提言～	無料	無	京都工芸繊維大学総務企画課 Tel:075-724-7013 E-mail:soumuki@kit.ac.jp	ホテルグランヴィア京都
1月中旬～下旬	尖ったものづくり総合プロデュース+ サステイナブルデザイン 特別講義(第2回)(詳細未定)	無料	講義日まで	京都工芸繊維大学サステイナブルデザイン 教育研究センター久保研究室 TEL:075-724-7682 e-mail:kuboken@kit.jp	松ヶ崎キャンパス
3月14日(金)～ 3月15日(土)	長もちの科学シンポジウム	参加費(10,000円、 宿泊費等3,000円)	有	京都工芸繊維大学 長もちの科学研究センター Tel:075-724-7310 E-mail:hnishimu@kit.ac.jp	京丹後キャンパス
3月15日(土)～ 3月16日(日)	2013年度第2回プラズマ制御 科学研究センター研究会	無料	無	電子システム工学部門 林康明 TEL:075-724-7415 E-mail:hayashiy@kit.ac.jp	工織会館多目的室
3月25日(火)	学位授与式	無料	無	京都工芸繊維大学 総務企画課 Tel:075-724-7014 E-mail:soumuki@kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス

その他、本学では体験入学などさまざまな催しを企画しています。イベント情報は、大学公式HP <http://www.kit.ac.jp/index.html> からご覧ください。

美術工芸 資料館 展覧会

開催期間
平成26年1月14日(火)～2月28日(金)

展覧会名・会場
▶ 染色芸術の世界－鶴巻鶴一から中堂憲一まで－
▶ 未来の途－美術・工芸・デザインの最新12人展

※展覧会の詳細につきましては、大学公式HP <http://www.kit.ac.jp/index.html> をご確認ください。



編集・発行 京都工芸繊維大学広報センター
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町
TEL (075) 724-7017 FAX (075) 724-7029
ホームページ <http://www.kit.ac.jp/>

表紙デザイン: デザイン学部門 中野デザイン研究室 撮影場所: 2号館北西
写真のコンセプト: 2号館の外壁を這う植物の色とそこに当たる夕日を捉えました。